

医師の目



③ 氏治賢 渡辺

方長 漢部 診療部 医学センター 大学 応慶

この国で漢方が活用されない理由の一つに、「臨床的エビデンス（証拠）がないから」ということがよく挙げられる。中国、韓国が国家戦略として積極的に伝統医学を推進するのに対し、わが国には専門部局がないうえ、「人・金・物」が圧倒的に不足しており、次世代を担う人材も育成されていないのが現状である。

2010年8月に英文誌

「サイエンス」に掲載された「PHY906」という中薬は、大腸がんなどの治療に使う抗がん剤「イリノテカン」の副作用である重度の下痢を抑制する、という結果であったが、黄芩湯（おうごんとう）という漢方薬の量を調整し、特許を取って臨床試験を行っている。

実日本でも、半夏瀉心湯（はんげしゃしんとう）という漢方薬に同様の効果があることは10年以上前に示されているのである。臨床・基礎のデータが蓄積されているにもかかわらず、活用されていないが、海外からこうした研究論文が出ると国内の関係者はみな注目する。数年前にハーバード大学と米国立衛生研究所（NIH）の助成金をもらった時に驚いたのは、ハーバード大が漢方薬を研究したがる一番の理由が、特許を取って、経済効果を生むことだったのである。

「日本型医療」創生を

の国々が、自国の伝統医学を売り込もうとしている一番の理由も経済効果である。伝統医学は未来の医療として莫大な経済効果が期待されている。

国が医療・健康を成長戦略の柱の一つにしているのなら、もっと漢方の安全性や有効性を検証するための投資を増やし、輸出産業に育てる方向に向かってほしい。近年の欧米での生薬需要の伸びには目を見張るものがある。国内の休耕地で生薬を栽培すれば地域経済を潤すばかりでなく、有力な輸出商品になるはずだ。

大事なことは、今がどう

だということよりも、この国の売りになる強みは何かを考えることはなからうか。自国の優れたものを認めようとせず、海外で認められたいと自国で認めるといってわが国の悪しき文化を改めるべきではないだろうか。

東西医学が融合した新しい医療の創生は、大きな経済効果を生むことのみならず、医療の効率化にも大きな役割を果たさだろう。今こそ海外の追随ではない、「日本型医療」を創生すべき時に来ている。その道筋をどうつけるかを真剣に考えたい。

生活面「医療」の記事やコラムに関するご意見、情報をファクス（03・6256・2774）か電子メール（iryu@tokyo.nikkei.co.jp）でお寄せください。